

日本地域福祉学会第36回大会のお礼

6月11日、12日に開催されました日本地域福祉学会第36回大会につきましては6月20日のオンデマンド配信終了をもちましてすべての大会プログラムが終了いたしました。本大会は当初、期待を込めて「ポストコロナ時代における地域福祉のあり方を考える」というテーマを想定しておりましたが、「ポストコロナ時代に向けた地域福祉のあり方を探る」へと変更し、with コロナの先にあるポストコロナ時代にむけてこれからの地域福祉にできることは何かを探っていくものとなりました。

大会1日目には、基調講演・対談と大会企画シンポジウムが開催され、「ポストコロナ時代に向けた地域福祉の現在と未来」というテーマで上野谷加代子先生からご講演いただき、小松理佐子先生と対談をいただきました。差別、偏見、孤立というコロナ禍が生み出した危機が顕在化する現在、それを少々の工夫や忍耐で対応することはできない、根本からの人間に対する尊厳の気持ち、命に対する向き合い方、平和と民主主義に対する考え方などの価値を地域で形成していくことが大切であること、それは、決してあらたな地域福祉というものではなく、これまでの地域福祉でも大切にしてきたことであり、これからも変わらないものであること、いま私たちにできること、求められていることを実践していくためには、これまでに学んだことを再び学び直し、改めて地域福祉とは何かを確認し、自覚することだということをご教示いただきました。

大会企画シンポジウムでは、コロナにより顕在化した課題を支援事例や調査結果などエビデンスに基づいて把握し、その課題を地域福祉としてどのように受け止めればよいのかについて議論いただきました。コロナ禍の緊急支援を担った社会福祉協議会の特例貸付の現場からは、職員の疲弊など多くの課題を抱えながらも、この経験を新たな地域福祉実践につなげようとする動きがあることが報告されました。また、各種の調査結果や支援事例から、コロナ禍の生活環境の変化が、高齢者、子ども、母子世帯など、元々脆弱な状況にあった人々の生活に重大な影響を与えていることが明らかにされました。議論を通して、こうした課題に対応するためには、地域の居場所づくりや分野・組織を超えた連携・協働の仕組みが重要になることが改めて確認できました。

大会2日目午前中には地域福祉優秀実践賞授賞式、日韓学術交流企画が開催されました。地域福祉優秀実践賞では3つの団体の表彰があり、その取り組みについて報告いただきました。また、日韓学術交流企画におきましては韓国からお二人をお招きし、コロナ禍において増加する生活困窮者に対する就労支援の動向と対策について、制度政策と実践の視点からご報告をいただきました。午後からは開催地企画シンポジウムと公開研究会が開催されました。開催地企画シンポジウムでは住み慣れた地域で最期を迎えるためには、医療サービスのみならず、生活支援ニーズがあることや家族への支援も必要であることについて報告をいただきました。さらに、終末期ケアを余命数ヶ月の間の医療・介護を中心としたケアと

考えるのではなく、医療・介護・予防・生活支援等々のより包括的ケアが必要であり、特に様々な地域福祉活動によって孤立せず自分らしく最期を迎えるためには重要であることを議論いただきました。公開研究会では地域福祉方法論研究会で行われてきたこれまでの研究成果について、2つのフィールド研究を通して、地域福祉に求められる新たな方法論について検討いただきました。

自由研究発表では61名の会員が各分科会にわかれて報告をいただきました。研究者による理論的な報告とともに、現場実践者による実際の取り組みを検証した報告もあり、また、研究者と実践者が協働して実践を研究としてまとめ、報告いただいているものなどがありました。研究者と実践者の両者から構成される地域福祉学会の特徴が表れていた自由研究発表であったように思います。そして、今回の発表はそのどこかにコロナ禍における地域福祉の視点が含まれた発表であったように感じられました。

本大会には395名の方に参加いただきました。参加された皆様方、ご支援いただきました多くの皆様方に心から感謝し、お礼を申し上げます。

2022年7月22日

日本地域福祉学会第36回大会実行委員会・大会事務局・大会運営事務局一同